

人間シュバイツァー…手紙から見た

シュバイツァーの人間性

友情の人 日本語版シュバイツァー書簡

集『生命への畏敬』（會津伸・松村国隆訳、

一九九三年刊）の監修者野村実は、その「日本語版に寄せて」において「受信者の多彩さを指摘した上で、「その誰、彼を問わず、シュバイツァー（以下「博士」）はすべてに誠実、友情（以下傍点は筆者）の限りを示している」と言っている。

人から「友情の億万長者」と評されたという彼は自ら、「ときどき自分に尋ねるので、よ、どうしてきみがぼくの生涯に現われ、こんなに友人となり、こんなに助けてくれたのか！」と友情を賛嘆する。妻を失った友に、「わたしがどんなに心からきみの悲しみを分かち合っているか」と同情を寄せ、ナチス弾圧下に苦しむユダヤ人の友には、



（講演中）

「あなたの状況が必要とする場合には、いつでも、どのようにでも当てにさせて頂いて結構です。ときには自明のことを言うことが役に立ちます」と心からの親切を申し出、ダグ・ハマーシヨルドに、「心の中ではいつもあなたに挨拶を送ってきました」と率直な気持ちを打ち明けている。

博士の手紙には、友人に対する祝意と賛意、あるいは敬意を表明するものが実に多い。友人たちの著書や講演、計画や行事などに対していちいち心のこもった応答をすることを欠かさない。ロマン・ロランに対して、「あなたの書いておられるものを時々読んでいることをただお伝えするためにこの手紙をしたためました」と書き送っている。彼は友情の人と言うより、友情をつくり出す人であった。最後に、博士の友情観を最もよく示していると思われるジャワハラル・ネルー宛ての手紙の結びを紹介しよう。「ネルーさん、わたしたちは再会できると思われません。しかし

わたしたちはお互いに思い出し、お互いを理解しています。なぜならわたしたちは、わたしたちを必要とし、わたしたちの運命となっている果すべき課題がありますから」

実践家 手紙というものはその性質からして生活的、実際の、具体的なものだろう。博士の場合もそれが顕著に表れている。

これは彼が第二次ランバレネ滞在にあたって、ストラスブールの友人たちに宛てた手紙だが、典型的なものの一つと言つてよい。彼はそこで「皆さん、いま重要な仕事がありません」と呼びかけ、必要品をアフリカへ運ぶ方法や包装の仕方などを克明に指示している。本書の訳者注によれば、博士は「このような注文と運送のための手紙をたくさん書いた」という。

博士はまた金銭のことでも甚だ実際的で、ものを注文する時には必ず支払いの方法を確認し、ランバレネに来る人にはどれ位の金ほどのようにして持ってくればよいのかを教え、自著の印税についてその税金のことにまで配慮し、病院の経営者としては金融事情にま

で注意していることが窺える。金銭については無頓着（であるべき）という日本人の偉人観からは遠いが、この「偉人」は実に「細心な」実践家であった。

医者になることを選んだのも、それが「愛の宗教の純粋な実践」になると考えたからという博士は、文化としての手仕事を重んじ、アフリカ人同僚たちと共に、自ら農作業、建築、土木工事に至るまで精を出した「行為の人」であった。

悲しみの人 博士の手紙にはごく稀にしか日本語で言えば「拝啓―敬具」の形式は見られない。その数少ない例外の中に、「忠実な、そして悲しげなシユワイツァー」という「敬具」があつて私の注意を惹いた。そして思った。たとえそれが意見の相違を手厳しく批判されたことへの返事として書かれたものであるとはいえ、自らを「悲しげな」と言い得る人の心がどれ程柔らかで、その魂がどれ程繊細なのだろうか、と。

この書簡集にただひとり匿名の受信者がいる。この「ある身障者（女性）」に「博士は語

りかける。「あなたはつらい、忍耐の生涯を与えられましたね。……もしあなたが平安を求めて奮闘していることを人々が分かったら、あなたこそ与える者です！ うわべの人間でなく、内面の人間が重要です」そして彼女に勧める。「あなたは外なる人としては苦しんでいます。安んずる人としては苦難のなかで平安に達し、また人々を平安にみちびくことができます。……ただ一つのことを、つまり内なる人間の成長を求めて、あなたがすべての理性よりも高い平和に達し、その平和の精神をいくらかでも人々に与えて下さい」と。

博士はまたある青年の母親に、「彼（息子）がいつまでも健康かつ有能で、しかも優しい心の持ち主でありますように……そして内面的な人間に成長されますように」と書き送っている。「内面的な人間」とはどのような人間を言うのか。必ずしも明らかではないが、当の博士自身がそれであることは確かだとすれば、それは「人間存在の悲哀」と「現世の病患」を知り（イザヤ書五三・三、文語訳）、それを負いぬこうとする人間のことでないだろうか。

シユワイツァーの思想と信仰

生命への畏敬 博士に「生命への畏敬」という思想がひらめいたのは一九一五年のことであった。それから六五年永眠までの半世紀間、彼はただこの一語をめぐって思索し、ただこの一語に向かつて生きた。驚くべき集中と言わねばならない。

当然のことながら、「生命への畏敬」は彼の手紙でも重要な話題であるが、専門の著書におけるような「緊密な敘述」はなく、むしろこの主題が「何年にもわたって対話のなか」に明確に示されている（原著の編者ペールの「報告」から）。そこで本講演の中では、これをほぼ年代順に三群に分けて考察してみたが一切省略して、「どの生命も神聖です！」とする生命への畏敬の倫理に生きる時、誰もが直面する戸惑いに、博士自身が答えていると言つてよい一通を紹介するに止めたい。

ランバレネ病院のある日の出来事を述べて博士は言う。「個々の場合の決定はめいめいの事です。しかしわたしには（運ばれてき

た) 餓死したかも知れない四羽のペリカンを殺すか、(ペリカンの餌として) 魚を殺すかの選択しかありません。わたしが一をとり他をすてる決心を正しくしているかどうか、わたしには分かりません」これが「人間性の偉人」のユーモアである。

平和思想

手紙の中には、博士の核武装、核実験反対の意思表示が数多く見られる。ウエルナー・ハイゼンベルク、パブロ・カサルス、野村実、ジョン・F・ケネディ、バルトランド・ラッセル宛てなど。

博士は一九五四年のノーベル平和賞受賞記念講演で、「現代における平和の問題」を論じ、「われわれは過去の両大戦において、恐しい非人間性の罪を負った」と指摘し、「平和達成の問題の解決は、戦争を倫理的理由——戦争はわれわれを非人間化するゆえに——から拒否することによってのみ可能であるという信念」を披瀝した。この消息は神学者ヘルムート・ティリケ宛ての次の手紙にもよく示されている。「わたしたちはまず武器や核兵器をあてにしない、より深い人間にならねばな

らない、とわたしは思うのです」

死刑制度

博士は、ヨーロッパ議会法律問題事務局からのノーベル賞受賞者に対するアンケートに次のように答えている。「拝復、コルネーユ(局長)様 わたしは死刑には反対です。われわれには人間を殺す権利はありません。われわれには人間から自由をうばう権利だけがあります。もし彼が人間社会にとって危険であるなら」

これなどは、手紙ならではの貴重な博士の意見表明であろう。因に、この手紙は博士の永眠の三か月前に書かれたものである。

キリスト教

博士は「自らの宗教的感情に関する発言にはとても控え目、控え目すぎる」人であつた。

その彼も手紙では何回も、彼がアフリカへ行った理由は「イエスの精神に命じられたから」であり、『イエス伝研究史』の結論が彼の信仰告白であることを明言している。「彼は命じる。そして彼に聴き従う人々には、愚者にも賢者にも、彼らがイエスとともに体験

するのを許された平和と活動、戦いと苦しみの中でイエスが自らを啓示する。そこで彼らは、言い表わしがたい神秘として、彼が誰であるかを経験するであろう」。またランバレネの暮しの中から、「イエスはわたしたちの主であります。わたしは自分がイエスに命じられた者であり、イエスに仕えようとする者であると思います」と告白している。

この徹底的なイエス信徒が、博士のキリスト教のすべてであろうが、書簡集の中から敢て付け加えるならば、「すべての外面化はキリスト教にとって障害です。これに對しすべて内面的キリスト教は活動的で人々の心をとらえます」という「内面的キリスト教」と、「宗教と思考は、愛によって神に帰属する神秘主義において出会います」という健全な「宗教思想」であろうか。

博士は七十年前にその時代を洞察して、「わたしは現在の世界の混沌をよく思い浮かべます。じつに人々は人間性のあらゆる理想に背を向けています」と嘆いた。しかしまた「わたしの認識は悲観的だが、意欲と希望は

樂觀的である」として、「世界哲学の時代が来ました。そして人類の運命ととりくむでしょう。瞑想と行動がたがい人類を正しい道にみちびくでしょう」と希望を語り、「現代の大問題はわれわれが真に人間的になることです。人間の使命は日ごとに、より人間的になることです」と私どもを励ましている。

注 紙幅の都合でこの報告は当日の話を大幅に省略、圧縮した。「」内は一部例外を除き、すべて「書簡集」からの引用である。ただし「書簡集」に付された通し番号は省略した。引用した手紙は三一四通の中七〇余通である。

(所載)

『ランバレネ』第一七四号

シュワイツァー日本友の会

二〇〇五年九月